



学校だより

令和5年4月28日(金)

5月号 No.2

横浜市立大豆戸小学校

TEL543-7911

自然との関わり方

副校長 山谷 浩司

瑞々しい青葉が色濃く枝葉を広げ、生命が躍動する季節となりました。幼少の頃より様々な生きものに興味をもち、身近な自然とふれあうことの多かった私にとっては、最も好奇心が掻き立てられる季節の到来です。ゴールデンウィークは、大自然を満喫できる場所で、ゆっくり過ごしたいと考えています。

学生時代の4年間で北海道で過ごしました。残念なことに、キャンパスライフを謳歌することができず、時間を見つけては北海道内の名峰に登って、気持ちをリフレッシュすることが常でした。中でも、大雪山系旭岳を起点に北海岳、白雲岳、忠別岳、トムラウシ山、十勝岳、富良野岳を5日間の行程で縦走した大学2年の時の経験が大きな財産となっています。時期は7月中旬でしたが、森林限界から山頂にかけて、所々雪渓が見られました。旭岳山頂からは、お米が入っていた丈夫なビニール袋に腰を下ろし、雪渓に覆われた斜面をそり滑りの要領で滑り降りました。登山道の両脇には、エゾ鹿やヒグマの糞が点在し、大木にはヒグマの爪痕が多数残されていました。ここが野生動物の生活圏であることを再認識し、緊張感を持続しながら歩を進めました。

源流に近い枝沢を横切る際、水中を瞬間移動する魚影に目が留まりました。帯広出身の友人に訊ねたところ、オショロコマというイワナの仲間であることが分かりました。夕方、釣りの得意な先輩が夕食用にオショロコマを10尾程釣ってきました。私は食べることよりも、魚体の美しさに見惚れました。このオショロコマとの出遭いが、後年、溪流釣り、更にはフライフィッシング(毛針釣り)へ心酔していくきっかけとなりました。

縦走3日目の午後。山の天候が急変しました。雲一つ無かった青空が、30分ぐらいの間に厚い雲に覆われ、周囲が薄暗くなりました。次の山小屋までは1時間以上かかることを鑑み、急遽、ビバークすることになりました。強風を避けることのできる窪地にテントを2張り設営し、6人のパーティーが2つに分かれてテントへ避難しました。その直後、バケツの水をひっくり返したような雷雨に見舞われました。気温は18℃から3℃まで急速に低下しました。低体温症を避けるために、リュックの奥からダウンジャケットを取り出し、トレーナーの上に着込みました。雷鳴が轟く中、雷は上空から落ちてくるという固定概念は脆くも崩れ、横に向かって光る稲妻を何度も目にしました。結局、雷雨は日没近くまで降り続けました。ビバークの最終判断をしたのは、登山経験が最も豊富なリーダーでした。リーダーの適切な判断のお陰で、遭難という最悪の危機を回避することができました。

翌日は前日の悪天候が嘘のように朝から快晴で、半日遅れの行程はすぐにリカバリーすることができました。双眼鏡を通して草を食むヒグマの親子を観察したり、ネズミを捕えるキタキツネの雄姿を目撃したり、愛らしい高山植物を写真に収めたりするなど、北海道の豊かな自然を満喫しました。最終日は富良野岳山頂から雄大な十勝連峰を望み、大自然の懐の深さと、怖さを体感した5日間の縦走を終えました。

1年ほど前の話になります。知床半島の景勝地を巡る観光船が沖合で消息を絶ち、沈没するという痛ましい事故が起きました。事故が起こった海域は、例年3月まで接岸している流氷の影響で海水温が低く、また、事故当日は、強風注意報と波浪注意報が発令されていました。このような悪条件の中で、なぜ船は出航したのか？

自然の雄大さ、荘厳さを直接体感することは大変意義深いことです。しかし、自然はいつも優しい一面だけを見せてくれるわけではありません。それだけに自然に対して畏怖の念を抱いてリスペクトするとともに、最悪の事態を想定したリスクマネジメントを講じる姿勢が、自然と対峙する上で欠かすことのできない「資質」なのではないでしょうか。

6年生は5月下旬に日光修学旅行に出掛けます。6月上旬には5年生の愛川体験学習が予定されています。事前の準備を入念に行ない、仲間と協力しながら有意義な時間を過ごしてほしいと思います。日光も、愛川も、横浜とは違った環境の中で2日間を過ごすこととなります。保護者の皆様には、お子さんの健康管理にご留意いただき、安心して2日間を過ごすことができますよう、ご支援、ご協力の程、よろしくお願い致します。